

(II) 各研修会の概要

◆第1回研修会 兼 コミュニティ・スクール連絡協議会

1. 目的 県内で実施される「学校を核とした地域力強化プラン」に係る市町の事業担当者や地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）を対象に、事業の趣旨や運営上の留意点などを説明することにより、事業の円滑な実施を図る。さらに地域学校協働活動推進のキーパーソンとなる地域学校協働活動推進員の委嘱、地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの一体的な推進方策についての理解を深め、普及に繋げる。

コミュニティ・スクール連絡協議会では、県内全域において市町の連絡体制の構築や情報の共有を推進するとともに、設置の拡大や運営の充実に向けた方策について研究する。

2. 主催 滋賀県教育委員会

- 3. 対象**
- (1) 「学校を核とした地域力強化プラン」事業実施市町担当者
 - (2) 各市町コミュニティ・スクール担当者
 - (3) 上記事業の未実施市町における参加希望者
 - (4) 各市町生涯学習・社会教育担当者
 - (5) 各市町学校教育担当者
 - (6) 地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）等

4. 日時 令和元年（2019年）5月17日（金）13:30～16:30

5. 日程

- 行政説明
- ・滋賀県における地域と学校の連携・協働推進方針について
 - ・事業概要について
 - ・今年度の研修計画について
 - ・補助金事務および事業実施の留意点について



- 講演 演題：「地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの一体的な推進について」

講師：長尾 彰 氏

（山口県教育委員会 地域連携教育エリアアドバイザー）

- 滋賀県コミュニティ・スクール連絡協議会

6. 場所 滋賀県庁東館7階大会議室

7. 参加者数 58名

8. 概要

- ・行政説明では、当課の担当より「令和元年度 学校を核とした地域力強化プラン」の事業概要、地域学校協働活動推進員の配置促進、年間研修計画、補助金事務手続きについて説明を行った。
- ・講演では、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進について、山口県における具体的な実践事例を写真や動画で示され、丁寧に説明された。講師から事業を推進する立場の参加者に対して、後押しする言葉かけもあり、好評を得た。
- ・コミュニティ・スクール連絡協議会では、CSアドバイザーの紹介とアドバイザー派遣の説明を行い、市町の担当者間の情報交換会を実施した。講師の長尾氏にも引き続き参加していただき、県内市町の実態を踏まえての助言をいただいた。

9. 参加者のアンケートより

- 具体例を交えながら、学校と社会がwin-winとなれるような関係づくりのきっかけを与えていただいたと思う。地域の特性を生かしつつ、その地域に合ったシステムが構築していくとよいと感じた。

- 具体的な事例をたくさん教えていただき、市に戻った時に実践してみたいものもあった。「1歩を踏み出すことが大切」が印象に残った。この1年でひとつでも1歩を踏み出せたら良いなと思った。

- 他市町、各アドバイザーの方々の話を聞くことができて大変勉強になった。CSを導入してから数年経つ学校が増えてきたこともあり、その面でのテコ入れが必要であると感じた。



◆第2回研修会（地域学校協働活動推進研修会）

1. 目的 将来を担う子どもたちの教育を支えるため、幅広い層の地域住民や企業・団体等の参画により、地域学校協働活動が推進されることが求められている。また、コミュニティ・スクールの導入も広がりを見せるなか、地域にとって学校が資源として活用され、学校が核となり地域が生き生きと躍動する地域学校協働活動の展開が期待されている。

そこで、地域学校協働活動推進の中核を担う対象者へ、地域学校協働活動のさらなる展開に向けての方策について理解を深め、これから地域と学校の在り方について学びを深めるために本研修会を開催する。

2. 主催 滋賀県教育委員会

3. 対象 (1) 公立幼稚園・小・中学校教職員、県立高等学校・特別支援学校教職員

(2) 地域学校協働活動推進の中心となる方

(※地域学校協働活動推進員、統括的な地域コーディネーター、地域コーディネーター等)

(3) 地域学校協働活動に地域ボランティアとして参画している人

(4) その他地域学校協働活動に関係する方

(※C.S関係者、各市町「学校を核とした地域力強化プラン」関係者、放課後児童クラブ関係者等)

4. 日時 令和元年7月12日（金）13：30～16：30

5. 日程

○講演 演題：「地域・学校が効果的に協働していく地域学校協働活動の在り方について」

講師：全国体験活動ボランティア活動総合推進センター コーディネーター 橋本洋光 氏

(亜細亜大学非常勤講師 日本フィリピンボランティア協会会长)

○ワークショップ テーマ「地域の教育資源を生かした社会に開かれた教育課程をつくるみよう」

6. 場所 滋賀県庁東館7階大会議室

7. 参加者数 98名

8. 概要

- ・講師より、地域と学校の連携・協働の意義や活動に関わる地域連携担当教職員、コーディネーターおよびボランティアに求められる役割について具体的な事例をもとに説明いただいた。
- ・後半のワークショップでは、講師のファシリテートのもと、「地域の教育資源を生かした社会に開かれた教育課程をつくるみよう」とのテーマで活動をした。地域を基本要素として参加者をグルーピングし地域の教育資源を共有・活用していくようにアイデアを出し合ってプログラムを作成した。また、成果物を交流し合うことで参加者がより深い学びをすることができた。

9. 参加者のアンケートより

- 各地域での取組について分かりやすく説明いただけた。これまで体験学習として取り組んできたことをさらにもう一步進めていくことで、地域とつながり、地域に貢献できる活動が見えてくると感じた。
- 様々な地域の成功例が具体例とともに紹介していただけたので視野が広がりました。地域学校協働活動に関わるコーディネーターなどの役割についても詳しく教えていただき、理解を深めることができた。
- 地域を共通項としてグループ分けしていただいたので、「教育資源」についてグループ内で熟議することができた。テーマに沿って深い話し合いができる。
- 「地域」には素晴らしい宝があることが他のグループの発表から知ることができた。そして、それを教材にしてグループで組み立てていくワークショップはとても楽しかった。グループで話をしていくことで同じ市でも地域によって特色がしっかりとあることが分かった。
- こういった研修会で「同じような悩みを持つ他地域との交流」があるとよい。悩みを共有し改善点を意見し合いたい。



◆コミュニティ・スクール推進事業研修会（コミュニティ・スクール推進フォーラム 兼 第2回コミュニティ・スクール連絡協議会）

1. 目的 学校と地域が一体となって子どもを育む「地域とともにある学校づくり」の充実方策について、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の有効的な取組に係る講演や事例発表をおして、県立学校や市町における円滑かつ効果的な導入や取組の充実に資する。

2. 主催 滋賀県教育委員会

3. 対象 (1) 公立幼稚園・小・中学校教職員、県立学校教職員

(2) 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）関係者、学校評議員

(3) 地域学校協働本部・地域未来塾関係者・土曜日の教育支援活動関係者

(4) 放課後子ども教室関係者・放課後児童クラブ関係者

(5) 家庭教育支援活動関係者・子育て支援機関関係者

(6) P T A、県・各市町社会教育委員、公民館職員

(7) 各市町担当職員

(8) 学校と地域の連携・協働体制について関心のある地域住民 など



4. 日時・会場・参加者数

○大津会場：令和元年6月14日（金） 13:30～16:45 ○近江八幡会場：令和元年8月20日（火） 13:30～16:30

滋賀県庁東館7階大会議室

参加者数 75名

滋賀県立男女共同参画センター 大ホール

参加者数 130名

5. 日程

○大津会場

□事例発表

「学校運営協議会の導入と立ち上げ」

滋賀県立伊香高等学校 校長 山田 薫 氏

□講演

演題：「コミュニティ・スクールの効果的な導入・推進に向けて」

講師：横浜薬科大学 教職課程センター
教授 梶 輝行 氏

元神奈川県教育委員会教育局総務室

県立高校改革担当課長

元中央教育審議会初等中等教育分科会
教育課程部会総則・評価特別部会委員

○近江八幡会場

□講演

演題：「これまでの地域連携を活かしたコミュニティ・スクールの導入・推進に向けて」

講師：文部科学省CSマイスター

ゆめ☆まなびネット 地域コーディネーター

大谷 裕美子 氏

□パネルディスカッション

テーマ「これまでの地域連携を活かしたコミュニティ・スクールの連携・協働について」

コーディネーター：大谷 裕美子 氏

パネリスト：北島 泰雄 氏（県CSアドバイザー）

三田村治夫 氏（高島市地域学校協働活動推進員）

平居 繁和 氏（湖南市教育研究所 所長）

□グループディスカッション[第2回コミュニティ・スクール連絡協議会]（両日・両会場）

6. 概要

・大津会場では、高校や特別支援学校での取組から学んでいただくために、県内の高校から学校運営協議会の立ち上げに至る経緯や取組事例を発表いただき、講師の先生からは神奈川県の県立学校への全校導入に取り組んでこられた実践などをお話しいただき、参加者の学びを深める機会となった。

・近江八幡会場では、「これまでの地域連携を活かしたコミュニティ・スクールの推進」をテーマに、これまで実践されてこられた学校・地域・行政のそれぞれの立場から実践例をお話しいただき、今後の市町で取り組むべき方向性について御示唆いただいた。



7. 参加者のアンケートより

・グランドデザインの話があり、本校がどのような学校を目指すのか、本校の「売り」は何なのかを考える機会になった。

・コミュニティ・スクールを目指し、学校支援から連携・協働へとステップアップしていきたい。

・講師が“苦勞”に焦点をあててパネルディスカッションを進めていただいたのはありがたかった。また、「学校づくり」だけでなく、「地域づくり」も考えて進めることも大切だと感じた。

・地域福祉との連携という考え方を教えていただき、一つの可能性として持つことができた。



◆地域における家庭教育支援基盤構築事業にかかる研修会

1. 家庭教育支援に係る研修会

- (1) 目的 核家族化や地域社会のつながりの希薄化等を背景として、子育ての悩みや不安を抱えた保護者の増加等、家庭教育の困難な現状が指摘されている。そうした中、本県においては地域の実情に応じた家庭教育支援の取組が展開されている。そこで、家庭教育支援や子育て支援関係者等が一堂に会し、今、求められる家庭教育支援のための体制整備に向けた具体的な手立てを学ぶ機会とする。
- (2) 主催 滋賀県教育委員会
- (3) 対象 「地域における家庭教育基盤構築事業」担当者・家庭教育支援員・市町子育て支援担当等
- (4) 日時 令和元年9月6日(金) 13:20~16:30
- (5) 会場 滋賀県庁東館7階大会議室
- (6) 参加者数 45名
- (7) 内容 ○事例発表
演題：橋本市家庭教育支援チーム「ヘスティア」の取組について
事例発表者：橋本市家庭教育支援チームチーム員 鈴木敏子 氏 松本祐代 氏
○講演
演題：「家庭教育支援員としての役割とは」
講師：泉大津氏家庭教育支援チーム リーダー 芦澤 万里子



(8) 概要

- 今回の研修では家庭教育支援員の役割を具体的に橋本市や泉大津市の事例から学んだ。特に「家庭教育支援として大切にしたいこと」として家庭教育支援では、情動面で家庭を支援すること、孤立させない人間関係づくりそして、人と人・人と行政機関とつなぐ役割が大切であることを教えていただいた。
- 橋本市の実践からは、家庭教育支援チームの「講座部」「広報部」「家庭訪問部」などの組織の成り立ちやチームワークを維持するための「対等・尊重・信頼・勇気づけ」という基本理念を学んだ。
- 訪問型家庭教育支援を行っている泉大津では、課題のある家庭の訪問活動を行い、寄り添いながら、様々な悩みを聞くことから始め、訪問活動が継続していくと、やがて保護者は本音を出せるようになり、ストレスが軽減され、サポーターとの信頼関係が生まれ、現実の問題と向き合えることができるようになるとお話しであった。
- 家庭教育支援の取り組みでは、保護者や子どものエンパワーメントによる成果が見られている。

(9) 参加者のアンケートより

- 今回の芦澤先生のお話にあった、保護者へのストレスを少しでも減らせる関わり方というものはとても大切だと感じた。教えるのではなく、寄り添う。難しいかもしれないが実践したい。
- ヘスティアさんの取り組みに大変共感しました。もう10年もこのよう活動を続けておられることに感心した。滋賀県でもこのような家庭教育支援チームが増えると、家庭も学校も地域社会も安心してすごせる、素敵な社会になると思った。

2. 全国家庭教育支援連絡協議会

- ・日時 令和2年2月18日(火) 10:00~16:15
- ・会場 文部科学省 東館3階第1講堂
- ・参加者数 3名(県2名・市1名)
- ・内容 「保護者に寄り添う“アウトリーチ型支援”の普及・定着に向けて
○事例報告 茨城県・山口県・岩国市・釧路市・泉大津市・湯浅町
○パネルディスカッション・ワークショップ(具体的な実施方法)
講師：ペアレンツキャンプ代表 水野 達朗 氏
- ・詳細は、文部科学省ホームページ「家庭の教育力の向上」を参照。

～学校も地域も元気になるための秘訣とは～

「地域とともににある学校づくり」推進フォーラム in 滋賀

兼 令和元年度 第3回滋賀県「学校を核とした地域力強化プラン」研修会

1. 主 催 文部科学省 滋賀県教育委員会

2. 趣 旨

- ・有識者による講話、有識者と県内関係者を交えてのディスカッション、県内外の取組事例報告等、全国規模の参加者を誘致するフォーラムをとおして、県内における地域とともにある学校づくりの機運を高める。
- ・滋賀県「学校を核とした地域力強化プラン」研修会を兼ねて開催することにより、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な取組推進を図るための研修の機会とする。

3. 日 時 令和2年(2020年) 1月24日(金) 12:30～16:40

4. 会 場 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール (〒520-0806 大津市打出浜15-1)

5. 対 象 地域と学校の連携・協働について関心のある方

公立学校・園教職員、コミュニティ・スクール（学校運営協議会）関係者、学校評議員、
地域学校協働活動関係者、PTA、社会教育委員、行政関係者等

6. 参加者 691名(滋賀県内264名 県外427名)

7. 内 容

アトラクション 12:30～12:50

○甲西高等学校吹奏楽部によるマーチング

開会行事 13:00～13:10

○主催者あいさつ 文部科学省 地域学習推進課 課長 水田 功
滋賀県教育委員会 教育長 福永 忠克

行政説明 13:10～13:30

○行政説明 文部科学省 地域学習推進課 課長 水田 功

トークセッション 13:30～16:30

コーディネーター 竹原 和泉氏 (NPO法人まちと学校のみらい 代表)

○第1部：「持続」するために大切なことは

バネリスト 新谷 明美 氏 (奈良市富雄中学校区地域教育協議会総合コーディネーター 奈良県CSアドバイザー)
宮治 一幸 氏 (滋賀県CSアドバイザー 湖南市立岩根小学校 元校長)
岩井 康浩 氏 (山口県萩市立田万川中学校 校長)

○第2部：教職員の役割とは

バネリスト 増渕 広美 氏 (CSマイスター 神奈川県立市ヶ尾高等学校 前校長)
松田 幸夫 氏 (滋賀県CSアドバイザー 長浜市立余呂小中学校 主任事務主査)
谷野 善則 氏 (岡山県浅口市立鴨方東小学校 教諭)

閉会行事 16:30～16:40



8. 概 要

- ・全国37都道府県からお越しの多数の参加者とともに、「学校も地域も元気になる秘訣とは」のテーマのもと、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進について具体的に学ぶ機会となった。
- ・本フォーラムでは、「持続するために大切なこと」、「教職員の役割」にターゲットを絞った参加型のトークセッションがメインであり、事前に大会申込者に聞いたアンケート結果を出発点に、竹原和泉さんのコーディネートのもと、第一部では持続可能な取組の実践者、第二部では校長、事務職員、地域連携担当職員としての実践者をバネリストに、具体的な事例を紹介しながら、参加者目線のトークセッションが展開された。
- ・甲西高校吹奏楽部生徒91名による壮大な歓迎アトラクションから始まり、事前アンケートの活用や大会冊子の表裏表紙の2色を使い、参加者全員が質問に答えるなどの参画型の仕組みづくり、セッションにより導き出されたキーワードをタイムリーにスクリーンに表示するなどのICT機器の効果的活用など、参加者の課題意識に対応した工夫が好評を得た。

「持続」のポイント

- ・「何のためか」(目的)を常に意識=ねらいがぶれないように

委員の選定、人材育成

- ・当事者として関わる委員の選定

CSと地域学校協働活動の違い

- ・P(Plan)はCS=審議機関 D(Do)は協働活動=アクション機関
- ・CSは「ミッション 課題の共有」 地域学校協働活動は「アクションの共有」
- ・なぜ2つ必要か?→一学運協のLet'sだけではできない。(担い手が協働活動)

教職員の意識

- ・CSでラクになるか?→そのことが目的ではない。もっと大きな効果がある。
- ・熟議で教職員が「胸襟を開く」ことが動き出すポイント

事務職員の参画

- ・地域の方とファーストコンタクトできる立場。地域連携教職員としても適任。

熟議・協働のポイント

- ・学校と地域はイコールパートナー:「一緒に」が合い言葉

- ・大人が学びながら、新しい扉を開けるつもりで

- ・先生方の「本音」を話し出す、学運協委員が聞くことが大切。

CSの成果: 地域と学校の小さな成功体験の共有を積み重ねて

- ・地域: 知れば知るほど応援したい

- ・校長: いざというとき頼りになる信頼関係ができた。

その他運営のポイント

- ・CSは漢方薬のようなもの。カンフル剤でも新薬でもない。

- ・ポイントは、思いを重ねる熟議、想いをカタチにする協働、それを支えるマネジメント

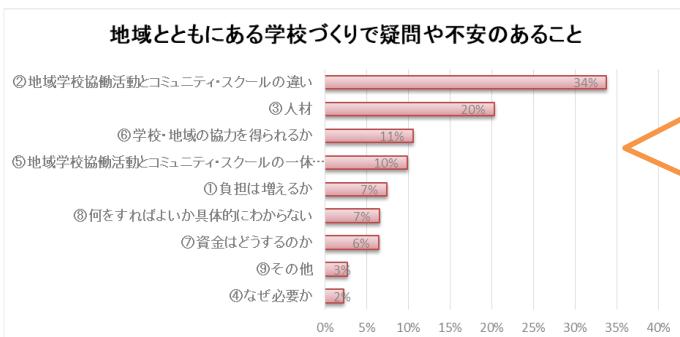
令和2年（2020年）1月24日（金曜日）
「地域とともにある学校づくり」推進フォーラム in 滋賀
トークセッションのまとめ

フォーラムテーマ：「学校も地域も元気になる秘訣とは」

→コミュニティ・スクールや地域学校協働活動をとおして、学校と地域がよきパートナーとして、「地域とともにある学校づくり」への好循環を生み出すことを、滋賀県では「学校が元気に」「地域が元気に」という言葉でイメージしている。
トークセッションでは、そのキーワードとなるものをテーマに設定し、秘訣に迫りたいと考えた。

第1部：「持続」するために大切なこととは

参加者事前アンケートより



参加者ニーズ

- 1 地域学校協働活動とCSとの違い
- 2 人材に関して
- 3 協力を得られるかの不安

「持続」のポイント

- ・「何のためか」（目的）を常に意識=ねらいがぶれないように
- ・しんどい子どもを支えることを常に意識（地域と学校で共有したこと）
- ・「細く、長く」積み上げる。他校を参考にはするが意識はしない。
- ・変えること：会議の内容、具体的な取組、地域と学校の役割の明確化
- ・変えないこと：目的やCSのあり様、無理をしないこと

委員の選定、人材育成等について

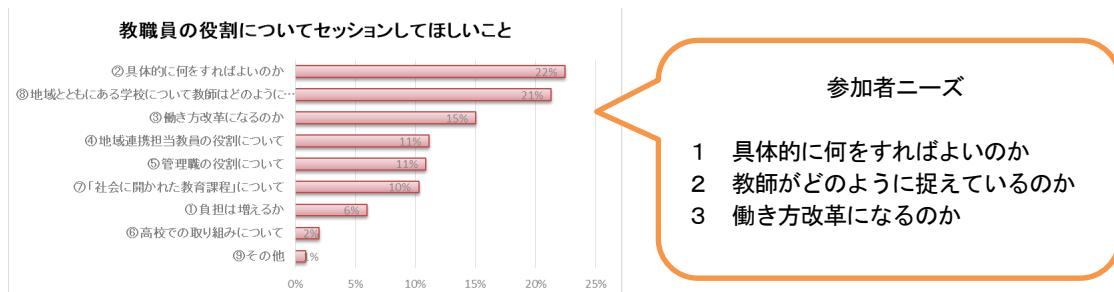
- ・委員の交代スパンを短く：何のために交代し、新たな方に担ってもらうかを委員と共有
委員経験者が地域活性化の次のステージで活躍できるように
- ・委員の充て職は避ける：地域には汗を流してくださる人材が埋もれている。
いろんな方と関わることの大切さ
- ・委員自身が育つ、喜びを感じてもらう（役目として来てもらうだけではなく）
- ・地域は学ぶ意欲にあふれている。
- ・当事者として関わる委員選定→「担い手」となる方を。（説明だけ、言いつぱなしの方ではなく）

CSと協働活動の違い

- ・P (Plan) はCS=審議機関 D (Do) は協働活動=アクション機関
- ・CSは「ミッション 課題の共有」 地域学校協働活動は「アクションの共有」
- ・なぜ2つ必要か?→学運協のLet'sだけではできない。(担い手が不明…)
協働活動だけでは「社会に開かれた教育課程」に収まりきらない。やつたフリになってしまふことも。

第2部：教職員の役割とは

参加者事前アンケートより



教職員の意識

- ・これから社会に通じる「本物の力」を育みたい→CSの可能性
- ・CSで「なにかやらなきゃ」からの脱却。PとDのバランス大切。
- ・校長の熱量が「魂」を吹き込む
- ・CSでラクになるか?→そのことが目的ではない。もっと大きな効果がある。
- ・学運協の様子をリアルタイムで職員室に流す、全教職員が1回は会議に参加するなど、理解を深めるための手立て必要。
- ・熟議で教職員が「胸襟を開く」ことが動き出すポイント

事務職員の参画

- ・地域の方とファーストコンタクトできる立場。地域連携教職員として適任。
- ・予算、行政仕事など、教員にはない視点で関われる。

熟議・協働のポイント

- ・「みんなで決めた」が勇気になる。学運協で審議することで、地域の後押しが生まれる。
- ・スクラップ→学校だけではしにくい。一つの行事に地域等いろんな方が関わっているため。
地域と一緒に答えを出すことが大切。教職員の意識改革にもなる。
- ・サイレントマジョリティの存在を大切に→「声の大きい人」の意見だけに流されず、意見を引き出す。
- ・学校と地域はイコールパートナー:「一緒に」が合い言葉
- ・「協働」:異なる立場の人が同じ目的のために対等な立場で活動すること。
大人が学びながら、新しい扉を開けるつもりで

- ・だれもがチームになれる学校・地域に→チーム学校
- ・地域に求められること→スキル、熱い思いだけでなく「ボランティアマインド・子ども理解・学校理解」を大切に。
- ・先生方の「本音」を話し出す、学運協委員が聞くことが大切。
- ・思いがあっても方向性がちがうと大きな力にならない→思いを重ねる熟議の必要性
- ・スクラップの基準がなければ思いつきの改革になってしまう。その基準を熟議する。

CSの成果：地域と学校の小さな成功体験の共有を積み重ねて

地域：知れば知るほど応援したい

学校、教職員への理解が深まった

校長：いざというとき頼りになる信頼関係ができた。

→困り感を共有できる関係 困難なときに一つになれる関係 学校からの困り感が訴えられたときに地域はよりアイデアを出せる。

○か×かでない判断を迫られたとき、学運協での協議後判断ができた。

→校長が判断するのに難しい部分に地域が寄り添う。

教職員：理解が深まった。（会議に出て）

職員室で話せないことも話せた

地域で子どもが成長する様子を見て納得した

その他運営のポイント

- ・看板をつけかえる（評議員から学運協へ）だけでは本質、取組が変わらない。
- ・説明や文字だけでは教職員や地域に伝わらない。
- ・CSは漢方薬のようなもの。カンフル剤でも新薬でもない。
- ・ポイントは、思いを重ねる熟議、想いをカタチにする協働、それを支えるマネジメント
- ・CSで教育の質の向上と業務の効率化を図る
- ・CS未導入校長の9割が「すでに地域とよい関係にある」との回答データあり。どのレベルで「協働」しているのか。おいしいケーキは知っていても、「ほんとうにおいしいケーキ」を知らない。
- ・子どもの未来のために、地域の未来のために、自分の経験を自分の言葉で語り合うストーリーテラーをめざしたい。